

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：12301

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20H01216

研究課題名（和文）地域社会に開かれた学びの場を創造するアートベース・リサーチ・モデルの構築

研究課題名（英文）Establishment of an Arts-Based Research model Creating Places for Learning Open to the Local Community

研究代表者

市川 寛也（Ichikawa, Hiroya）

群馬大学・共同教育学部・准教授

研究者番号：60744670

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 9,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、研究者、アーティスト、実践者からなる実践コミュニティを形成することにより、地域社会における芸術と教育の関係性について考察を進めてきた。特に、岩手県金ケ崎町における「金ケ崎芸術大学校」や茨城県水戸市における「放課後の学校クラブ」でのアクションリサーチを通して、アートプロジェクトが研究の方法としても有効であることが明らかにされた。それは、既存の社会制度では容易に達成することのできない「もうひとつの世界」を一種のフィクションとして仮説的に実現する手段と位置付けることもできる。こうして開かれた「学びの場」に、本研究課題が示すところのアートベース・リサーチの意義を見出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、地域社会における芸術と教育の関係性について、アートプロジェクトを通して構築される「学びの場」に着目した。特に、芸術を研究の方法として用いるアートベース・リサーチを取り入れることで、芸術教育のフィールドを拡張することを試みた。今日では、多くの地域（自治体）においてアートプロジェクトや芸術祭が文化芸術行政の手段として実行されている。しかし、その教育的意義については十分に議論されているとは言い難い。そのような状況に対して、アートプロジェクトを研究者を含む様々な立場の人々がともに地域に関わる実践コミュニティとして位置づけることにより、これからの地域社会における芸術の意義を改めて提示した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the relationship between art and education in local communities. To this end, a community of practice, including researchers, artists, and practitioners, was formed. In particular, action research at "Kanegasaki Art College" in Kanegasaki Town, Iwate Prefecture, and "School Afterschool Club" in Mito City, Ibaraki Prefecture, showed that art-based projects are also effective as a research method. It can be positioned as a means of hypothetically realizing an "alternative world" that cannot be easily achieved with existing social systems. The "places for learning" open to the local community in this way may be a kind of fiction, but this is where the significance of arts-based research is indicated.

研究分野：美術教育、文化資源学

キーワード：アートプロジェクト 地域社会 実践コミュニティ 社会教育・生涯学習 芸術支援 場所 文化行政
フィクション

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C-19、F-19-1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究を構想していた2019年度は、新型コロナウイルスの感染拡大が始まる前であったため、2024年現在とは社会のあり方に少なからぬ違いがある。これを前提に、本研究の出発点となっているのは、日本各地で開催されるアートプロジェクトに対する批判的検証である。とりわけ、地方自治体を主体に開催される芸術祭やアートプロジェクトは、観光事業としての側面に重心が置かれることが多く、地域住民の存在が不可視化されることも少なくない。このような状況に対して、規模の小さなアートプロジェクトのあり方を検討することにより、芸術を軸とした学びの場について考察することが本研究の基軸となる。

その上で、以下の二つの問いに基づき研究計画を立てた。第一に「芸術が本質的に有する教育的側面と教育が本来備えるべき創造性の接続は可能か」という観点である。第二に「アーティストを起点とする実践コミュニティからどのような学びが育まれるか」という観点である。今日では、アートプロジェクトなどの実践を通して芸術と社会が直接的に接続する回路が増加しつつあるが、今もなお芸術は人々の生活から切り離された特別な物事として認知されている。このような状況に対して、芸術実践を通して地域社会に開かれた「学びの場」に着目することで、日常と芸術とが地続きの関係にあるような創造的な社会を実現するための理論的・実践的モデルの構築を目指す。

2. 研究の目的

本研究は、アートプロジェクトなどの芸術実践を通して地域社会に開かれる「学びの場」のあり方について、理論的・実践的に考察することを目的とするものである。この根底には「創造的な地域はいかに育まれ得るか」というリサーチクエストがある。そして、この目的を達成するための研究方法として、社会学や教育学などの分野でも用いられるようになってきた「アートベース・リサーチ (ABR)」に着目する。これは、研究者自身が芸術活動の当事者として携わりながら、芸術 (アート) を研究方法に取り入れる手法である。再現性を重視する従来のサイエンスベース・リサーチに対して、状況や環境に応じて変化する個別事象を対象とする研究にも有効性が認められる。

本課題では、地域ごとに実施形態が異なるアートプロジェクトを研究対象として見据えつつ、芸術のもつ本質的な教育性と教育のもつ本質的な創造性との融合を実現する社会教育の理論的実践モデルを構築する。その際、いわゆる研究者のみならず、アーティストや実践者の参画を得た共同研究のための実践コミュニティを構築し、社会と芸術と教育の重なる領域に成立し得る芸術理論を立ち上げる。

3. 研究の方法

本研究は、理論研究と実践研究の両輪から構成される。

まず、理論研究については、まだ研究方法が定まらないアートベース・リサーチ (ABR) について、現状の概観を把握することから始める。特に、ここでの「アート」が何を意味しているのか、という観点に着目し、一つのキーワードとして「フィクション」を抽出した。その上で、歴史をさかのぼって ABR を適用し得るような事例を調査し、その現代的解釈を試みた。なお、本研究において事例調査の対象とした主なフィールドは、長野県上田市、徳島県三好市、東京都豊島区である。これらの事例調査については、以下の実践研究と連動させながら研究を進めた。

実践研究については、異なる二つの地域におけるアートプロジェクトの実践を通じたアクションリサーチを展開した。第一に、茨城県水戸市に所在する公立小学校において「放課後の学校クラブ」と称するアートプロジェクトを展開した。これは、同小学校が推進するコミュニティスクールとの関連において始まったプロジェクトであるが、本課題においては、学校・地域・家庭との関係性の中に学びの場を生み出す実践モデルとしての検証を行った。第二に、岩手県胆沢郡金ヶ崎町では、重要伝統的建造物群保存地区における保存物件を舞台に「金ヶ崎芸術大学校」と称するプロジェクトを展開した。ここでは「生活の芸術化」を志向した各種の実践を通して創造的な学びの場が地域にもたらす影響について分析を行った。

4. 研究成果

【2020年度】

研究初年度は、主たる方法論となるアートベース・リサーチ (ABR) に関する調査を行った。その際、Patricia Leavy による『*Handbook of Arts-Based Research*』を基礎文献として用い、ABR における「アート」の位置づけについて考察を行った。とりわけ、従来のサイエンスベース・リサーチと大きく異なるキーワードとして「フィクション」という観点に着目し、あり得るかもしれない世界のあり方を実践する場としてのアートプロジェクトの意義を導き出した (論文3)。

また、歴史的な視座から、地域に根差した創造的な学びの場について調査を行った。具体的なフィールドとして取り上げたのは長野県上田市である。この地域では、大正期 (1919年) に山本鼎によって「自由画運動」および「農民美術運動」が始まっている。これらは、芸術による社

会実践という意味において、今日的な意味での ABR に近いものと位置づけられる。とりわけ後者については、農村における工芸を基軸とした社会教育（成人教育）としての側面と、農閑期における副業を奨励する地域経済としての側面が重なったことにより、現在に至るまで伝統工芸として継承されている。文献調査に加え、関係者への聞き取り調査等を行うことで、地域社会における文化創造のプロセスを明らかにした（論文 2）。

上記の理論研究と並行して、ABR の手法に基づくコミュニティ型アートプロジェクトの実践研究に取り組んだ。2020 年度は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、当初の計画から大きく変更することとなったが、岩手県胆沢郡金ケ崎町における「金ケ崎芸術大学校」のプロジェクトを通して保存物件を活用した学びの場づくりを展開した。あわせて、アートプロジェクトを分析する上で「ポストミュージアム」の考え方を導入することを試みた。これにより、従来のサイト・スペシフィックな展示とコミュニティ・スペシフィックな実践とを異なる視点から考察する枠組みを構築した（論文 1）。

- 論文 1) 市川寛也「ポストミュージアム概念に基づくアートプロジェクトの類型学—地域社会における教育的意義を中心に—」『美術教育学』42 号、2021 年、pp. 67-82
論文 2) 市川寛也「「農民美術」の成立背景と受容をめぐる一考察—地域社会における文化創造の視点から—」『美術教育学研究』53 号、2021 年、pp. 25-32
論文 3) 市川寛也「アートベース・リサーチの方法としてのアートプロジェクトの有効性」『群馬大学共同教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編』56 号、2021 年、pp. 59-68

【2021 年度】

前年度に引き続き「金ケ崎芸術大学校」におけるアクションリサーチを展開した。このプロジェクトは、宮沢賢治が 1926 年に著したとされる「農民藝術概論綱要」をテキストとして参照しながら構想したものである。特に、生活そのものを芸術とみなす「生活の芸術化」の構造に着目した。これは、初年度に研究を進めた山本鼎の「農民美術」ともつながる視点となる。2021 年 9 月には、宮沢賢治いわて学センター第 9 回研究会において、「農民藝術」の現代的解釈に着目した口頭発表を行った（オンライン開催）。ここでは、異なる分野の研究者からの示唆に富むコメントによって議論を深める機会となった。

実践の側面からは、長期化する新型コロナウイルスの感染拡大の影響により地域間の分断が生じつつある状況を踏まえて、夏休みの児童を対象とする「小学生ウィーク」を企画した。ここでは、グラフィックデザイナーによるポスターづくりなど、夏休みの宿題から派生したワークショップを集中的に開催した（図 1）。また、研究成果の公開の一環として、石と賢治のミュージアム（岩手県一関市）において「創造的生活のすすめ」と題した展示を実施した（2021 年 11 月）。2022 年 3 月には金ケ崎町内の複数の施設（金ケ崎要害歴史館、金ケ崎町立図書館、白糸まちなみ交流館）において「卒業記念展」を開催した。これは、「金ケ崎芸術大学校」の設立当初から深く関わってきた大学生のメンバーが大学を卒業するタイミングにあわせた企画であった。ただし、感染拡大が続いていることから、町民以外は文化施設への入館を禁止されている状況下での開催となったため、コロナ禍における地方自治体の主導による地域間の分断を可視化するような結果となった。

上記に加え、茨城県水戸市の公立小学校において展開している「放課後の学校クラブ」についてもアクションリサーチの継続の仕方を探っていった。この活動は、同小学校が設置するコミュニティルームを拠点としてきたが、コロナ禍への対応として同教室が普通教室として転用されていたことから、2020 年度は活動が停滞していた。一方で、オンラインでの学びが定着してきたことも踏まえ、適宜遠隔での活動も取り入れながらプロジェクトを継続していった。それぞれの家から接続することにより、これまでの学校と地域（コミュニティ）という軸に加えて家庭という第三の場が浮かび上がってきた点は、その後の研究にもつながっていく。

また、これらの実践／研究とはまた別の文脈において、地域社会と妖怪文化の関係性にスポットを当てた研究を展開した。ここでは、福岡県久留米市田主丸や徳島県三好市山城町における妖怪文化を活用した地域づくりの取り組みにスポットを当て、コミュニティ・スペシフィックな学びのダイナミズムを導き出した（論文 4）。



図 1 「小学生ウィーク」の様子

- 論文4) 市川寛也「怪異に学び戯れる人々—妖怪文化を育む虚構の共同体に着目して」『怪異と遊ぶ』青弓社、2022年、pp. 238-260
- 論文5) 市川寛也「アートプロジェクトとしての「年中行事」の創造的再生—「創造的生活学」の構築に向けて—」『群馬大学共同教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編』56号、2022年、pp. 11-21
- 口頭発表1) 市川寛也「『農民芸術』の視点から地域と芸術の関係性について考える—「金ヶ崎芸術高等学校」におけるアクションリサーチを通して—」宮沢賢治いわて学センター第9回研究会、オンライン、2021年9月24日

【2022年度】

前年度に宮沢賢治いわて学センター第9回研究会において発表した内容を踏まえ、宮沢賢治が記したところの「農民芸術」の思想を一種の「地域芸術論」として解釈する論文にまとめた(論文6)。特に、「農民芸術概論綱要」に書かれた「誰人もみな芸術家たる感受をなせ」というフレーズは、「金ヶ崎芸術高等学校」はもとより「放課後の学校クラブ」のプロジェクトにも通底する論点となる。

実践研究の側面では、前年度に引き続き「小学生ウィーク」を実施した。そこでは、新たに研究分担者として参加していただいた版画家の城山萌々およびグラフィックデザイナーの石井一十三との共同研究として「版画でポスターをつくろう」と題したワークショップを展開した(図2)。これは、小学校の図画工作科の題材でしばしば用いられる紙版画(部分的に実物版画を含む)の技法をもとにポスターのメインビジュアルを制作する活動である。ここでは、版画のもつ複製性・偶然性・協働性に着目した(論文9)。また、一連の実践を踏まえ、文化財としての重要な伝統的建造物群保存地区を活用した学びの場のあり方について、動態保存の観点を援用しながらまとめた(論文7)。

また、「金ヶ崎芸術高等学校」の手法の応用可能性を検証するために、群馬県吾妻郡中之条町において「中之条芸術大学」と称するプロジェクトを展開した。同町では、2007年より「中之条ビエンナーレ」というアートプロジェクトを展開している。このプロジェクトに、筆者が所属する群馬大学美術教育講座が参加することで、大学のない町にバーチャルな芸術大学を立ち上げることを目指した。この立ち上げに向けたプロセスについては、研究分担者の郡司明子をはじめ、群馬大学美術教育講座の教員の共同執筆により論文としてまとめた(論文8)。

さらに、もう一つの論点として、金ヶ崎町と中之条町は、人口規模が同程度であることから比較研究の対象としても有効である。金ヶ崎町には文化行政に相当するセクションがないが、中之条町では直接的にアートプロジェクトを運営していることから、行政の文化化が深化していることが考えられる。これは、地域の外側から訪れる属性の異なる多様な人々への「開かれ」という尺度において検証することができる。これについては、本研究の出発点でもある「創造的な地域はいかに育まれるか」という問いについて考えるための重要なファクターとなるだろう。



図2 「版画でポスターをつくろう」の様子

- 論文6) 市川寛也「地域芸術論としての「農民芸術概論綱要」の現代的解釈の試み—「金ヶ崎芸術高等学校」における実践を通して」『賢治学+』2号、2022年、pp. 91-110
- 論文7) 市川寛也「伝統的建造物群保存地区を活用した学びの場づくりの試み—金ヶ崎芸術高等学校「小学生ウィーク」の事例から—」『美術教育の理論と実践』2号、2022年、pp. 9-22
- 論文8) 郡司明子、市川寛也、喜多村徹雄、林耕史、齋江貴志「中之条ビエンナーレにおける群大美術の取り組み—「中之条芸術大学」はじまりに際して—」『美術教育の理論と実践』2号、pp. 87-110
- 論文9) 市川寛也、城山萌々、石井一十三「版に表す活動を通じた協働的な学びに向けた実践研究—「版画でポスターをつくろう」のプログラムを中心に」『群馬大学教育実践研究』40号、2023年、pp. 61-70

【2023 年度】

本課題の最終年度を迎えるにあたり、改めて「創造的な地域はいかに生まれ得るか」という問いに立ち返った。ここで一つのキーワードとして立ち上がってきたのが「居住」という観点である。これに関連して、近代以降に鉄道敷設に伴う地域開発が進むとともに新興芸術の拠点の一つとなった池袋（東京都豊島区）にスポットを当てた。そこでは作家や芸術家の居住歴や交流について文献による調査を行い、文化資源学の観点から研究報告を執筆した（論文 10）。

こうした観点を踏まえ、「生活者」が「生産者」になる状況を仮設的に構築することを目指して、研究協力者の庄司知生を中心に《生活者工房》のプロジェクトを展開した。ここでは、「金ヶ崎芸術大学校」を拠点に、漆芸や陶芸のワークショップを継続的に展開し、参加者によるコミュニティ形成の過程を明らかにした（論文 12）。ここには、山本鼎の「農民美術」の現代的解釈に基づく実践を見出すこともできる。

また、本研究を契機に始まった「小学生ウィーク」も 3 回目を迎えたことから、異なる地域間の特性を比較するプログラムを組み込んだ。具体的な手法として「放課後の学校クラブ」の参加児童を対象に、「小学生ウィーク」の期間中に「金ヶ崎芸術大学校」を訪れる修学旅行を実施するというものである。これについては、まだ論文としてまとめるには至っていないが、筆者が月例で執筆しているブログ記事「図工のあるまち」において詳細をレポートしている。

加えて、地域間の比較という観点からは、福島県葛尾村にてアーティスト・イン・レジデンス事業を展開する「Katsurao Collective」との相互視察を実施した。先に挙げた「居住」というキーワードに照らし合わせれば、アーティスト・イン・レジデンスの事業は、文字通り短期的にアーティストが特定の地域に居住することによって成立する。この調査についても、まだ学術論文としては未発表だが、宮城県仙台市を拠点とするアートノードが発行する『JOURNAL 11 号』においてレポートを執筆した。

このように、本研究では、研究者、アーティスト、実践者が相互に交流しながら成果を積み重ねてきた。「金ヶ崎芸術大学校」を拠点に毎年秋に開催しているアートプロジェクト「城内農民芸術祭」もその一環である。このプロジェクトに 2020 年度から毎年参加している研究協力者の村山修二郎も、アーティストとして本研究課題に携わってきた（論文 11）。ここでは、アートプロジェクトという手法が、地域づくりや表現の一形式にとどまらず、研究の方法としても有効であることが明らかにされた。それは、ある意味において「もうひとつの世界」という「フィクション」を身近な実践として実装する手段と位置付けることもできよう。ここに、本研究課題が示すところのアートベース・リサーチ（ABR）の意義を見出したい。

論文 10) 市川寛也「田園・郊外・副都心：新興の芸術を育む新興地域としての「池袋」に関する考察」『文化資源学』2023 年、pp. 1-14

論文 11) 市川寛也、村山修二郎、城山萌々「自然物を用いた造形活動に関する実践研究 身近な植物を取り入れたワークショップを通して」『群馬大学教育実践研究』41 号、2024 年、pp. 83-91

論文 12) 市川寛也、庄司知生「工芸ワークショップを通じた実践共同体の構築の可能性—アートプロジェクト《生活者工房》の取り組みを踏まえて」『美術教育学』45 号、2024 年

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 市川寛也、庄司知生	4. 巻 45
2. 論文標題 工芸ワークショップを通じた実践共同体の構築の可能性 アートプロジェクト《生活者工房》の取り組みを踏まえて	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 美術教育学	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市川寛也、村山修二郎、城山萌々	4. 巻 41
2. 論文標題 自然物を用いた造形活動に関する実践研究 身近な植物を取り入れたワークショップを通して	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 群馬大学教育実践研究	6. 最初と最後の頁 83-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 市川寛也	4. 巻 21
2. 論文標題 田園・郊外・副都心：新興の芸術を育む新興地域としての「池袋」に関する考察	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 文化資源学	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市川寛也	4. 巻 11
2. 論文標題 Katsurao Collective アートは「資源」となり得るか？	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 JOURNAL	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市川寛也	4. 巻 2
2. 論文標題 伝統的建造物群保存地区を活用した学びの場づくりの試み 金ケ崎芸術大学校「小学生ウィーク」の事例から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 美術教育の理論と実践	6. 最初と最後の頁 9-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 郡司明子、市川寛也、喜多村徹雄、林耕史、齋江貴志	4. 巻 2
2. 論文標題 中之条ピエンナーレにおける群大美術の取り組み 「中之条芸術大学」はじまりに際して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 美術教育の理論と実践	6. 最初と最後の頁 87-110
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市川寛也	4. 巻 2
2. 論文標題 地域芸術論としての「農民芸術概論綱要」の現代的解釈の試み 「金ケ崎芸術大学校」における実践を通して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 賢治学+	6. 最初と最後の頁 91-110
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市川寛也、城山萌々、石井一十三	4. 巻 40
2. 論文標題 版に表す活動を通じた協働的な学びに向けた実践研究 「版画でポスターをつくろう」のプログラムを中心に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 群馬大学教育実践研究	6. 最初と最後の頁 61-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 市川寛也	4. 巻 329
2. 論文標題 児童作品解説 私の見方	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 形 forme	6. 最初と最後の頁 20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 市川寛也	4. 巻 57
2. 論文標題 アートプロジェクトとしての「年中行事」の創造的再生 「創造的生活学」の構築に向けて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 群馬大学共同教育学部紀要. 人文・社会科学編	6. 最初と最後の頁 11-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 市川寛也	4. 巻
2. 論文標題 怪異に学び戯れる人々 妖怪文化を育む虚構の共同体に着目して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 怪異と遊ぶ	6. 最初と最後の頁 238-260
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市川寛也	4. 巻
2. 論文標題 想像の道へ漕ぎ出して 漂着と箱をめぐる覚え書き	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Fumito Urabe "Solitude" Just like Sand from the Ganges River	6. 最初と最後の頁 38-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市川寛也	4. 巻 107
2. 論文標題 書評 谷口文保 / 九州大学出版会 アートプロジェクトの可能性 芸術創造と公共政策の共創	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 美術科教育学会通信	6. 最初と最後の頁 32-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 市川寛也	4. 巻 42
2. 論文標題 ポストミュージアム概念に基づくアートプロジェクトの類型学 地域社会における教育的意義を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 美術教育学	6. 最初と最後の頁 67-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 市川寛也	4. 巻 53
2. 論文標題 「農民美術」の成立背景と受容をめぐる一考察 地域社会における文化創造の視点から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 美術教育学研究	6. 最初と最後の頁 25-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 市川寛也	4. 巻 56
2. 論文標題 アートベース・リサーチの方法としてのアートプロジェクトの有効性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 群馬大学共同教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編	6. 最初と最後の頁 59-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 市川寛也
2. 発表標題 「農民藝術」の視点から地域と芸術の関係性について考える 「金ヶ崎芸術大学校」におけるアクションリサーチを通して
3. 学会等名 宮沢賢治いわて学センター第9回研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 市川寛也
2. 発表標題 文化資源としてのアマビエー妖怪文化の現代的活用の視点から
3. 学会等名 第20回文化資源学フォーラム（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 『美術教育の理論と実践』編集委員会	4. 発行年 2022年
2. 出版社 学术研究出版	5. 総ページ数 238
3. 書名 美術教育の理論と実践 第2巻	

1. 著者名 怪異怪談研究会、一柳 廣孝、大道 晴香	4. 発行年 2022年
2. 出版社 青弓社	5. 総ページ数 296
3. 書名 怪異と遊ぶ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

図工のあるまち
<https://www.zukonomikata-nichibun.net/zukonoarumachi00>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	郡司 明子 (Gunji Akiko) (00610651)	群馬大学・共同教育学部・教授 (12301)	
研究分担者	茂木 一司 (Mogi Kazuji) (30145445)	跡見学園女子大学・文学部・教授 (32401)	
研究分担者	松村 泰三 (Matsumura Taizo) (80573667)	東北芸術工科大学・芸術学部・教授 (31501)	
研究分担者	城山 萌々 (Shiroyama Momo) (80466672)	羽陽学園短期大学・幼児教育科・講師 (41504)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------